

弁当箱

現在、民俗分野では美術工芸分野と共に専門家の協力を得て、日用品として使われてきた陶磁器の資料調査を行っています。今回はその中から、弁当箱（登録番号25-1208）をご紹介します。

弁当箱には木製の外箱が付属しています。外箱（縦11.6cm×横14.5cm×高15.4cm）の提げ手には金具が付き、前蓋の裏側の対角線には箸箱が付いています。陶磁器の弁当箱（長径11.8cm×短径8.7cm×高11.2cm）は、ご飯入れ一段、おかず入れ二段の三段重になっています。おかず入れの内側にメバルとアマダイらしき魚が、外側には海松文（海藻の一種を文様化したもの）が描かれています。19世紀前半頃に作られた高浜焼だと考えられます。高浜焼は宝暦12年（1762年）に始まった天草市天草町高浜にある窯で、天草陶石を使った白磁の焼き物が今でも作られています。本品は白地に藍色の海松文が映えて、浅瀬の海を思い起こさせてくれます。この弁当箱はどんな場所で使われたのでしょうか。昨今のコロナ禍の影響で外に遊びに行く機会が減ってしまいましたが、終息した折には、お弁当をもって野山や海に出かけてみませんか。

本品は令和4年（2022年）3月12日（土）から始まる館蔵品展『肥後のやきもの』で展示予定です。ぜひ実物を見に博物館へお越しください。



熊本の自然

石神山の^{りんけいせき}鱗珪石

熊本市西区にある石神山は、今では公園として家族連れでにぎわう場所ですが、かつては石材となるデサイト（安山岩よりも無色鉱物が多く、一般的にやや白みの強い岩石）を切り出す採石場でした。石神山は金峰山系の東麓に位置し、金峰山（一ノ岳）よりもずっと古い時代（およそ100万年前）に活動した火山体の一部で、溶岩ドームとそこに繋がるマグマの通り道であったようです。この採石場の岩の割れ目からは、鱗珪石という鉱物が見つかっていました。鱗珪石は石英（水晶）と同じ組成の鉱物ですが、より高温で形成されるもので、水晶のような六角柱状ではなく六角形の薄い板状の結晶をつくります。カバーガラスのように薄くて透明な結晶が無数に重なる様子は、その名のとおりの魚の鱗が散らばっているかのようです。鱗珪石そのものは他地域のデサイトや安山岩から産出しますが、石神山のもののようには大きさが5mmを超えるものは大変貴重です。そのため、日本の鉱物図鑑に載っている鱗珪石の大半は石神山産のもので、日本地質学会が選定する「県の石」では、「熊本県の鉱物」に選ばれています。既に閉山しているため採集はできませんが、熊本博物館で見ることができますので、ぜひ常設展示室にてこの鉱物の薄く繊細な輝きをご覧ください。



現在の石神山公園



鱗珪石（左下：丸抜きは結晶の拡大写真）



くまはく NEWS LETTER

Vol. 7

能楽伝承 — 熊本の能文化 —

2021年12月18日（土）～2022年2月13日（日）

2021年11月

熊本博物館
KUMAMOTO CITY MUSEUM

■展示会案内

- ・企画展 未来へつなぐ植物の記録
- ・企画展 能楽伝承—熊本の能文化—

■展示会報告

- ・企画展 震災をふりかえる—大地とモノが語る熊本地震—
- ・特別展 銀河鉄道の夜—KAGAYA 星空の世界展

■イベント報告

- ・熊本地震シンポジウム
- ・自由研究相談会
- ・生きもの観察会
- ・博物館実習

■資料紹介

- ・弁当箱

■熊本の自然

- ・石神山の鱗珪石

《薄茶地鱗三階松榎車模様厚板》松井文庫（八代市立博物館寄託）
能面《小面》北岡神社所蔵
蘭井守供筆《三番叟之図》熊本城頭彰会（当館寄託）
杉谷雪樵筆《翁図》中村家文書（当館寄託）
《伊達正宗書状》中村家文書（当館寄託）

展示会案内

企画展『未来へつなぐ植物の記録』

2021年10月2日（土）～11月28日（日）

ー令和2年7月豪雨で被災した前原勘次郎の植物標本ー』

昨年の豪雨災害により、人吉城歴史館に収蔵されていた熊本の植物学者・前原勘次郎氏(1890-1975)によって収集された植物標本(さく葉標本)約3万3千点が浸水被害を受けました。被災したことで多数の標本が泥で汚れ、カビが発生した状態となってしまいましたが、これらの標本を守り、今後も保存するための「標本レスキュー活動」が全国の博物館や大学等で行われています。

本展では、この活動の取り組みや当館が行った標本のクリーニング・乾燥作業の様子などについて紹介しています。



企画展『能楽伝承 ー熊本の能文化ー』

2021年12月18日（土）～2022年2月13日（日）

能楽を深く愛好したことで知られる細川家の家風のもと、江戸時代の熊本には能文化が深く息づきました。本展覧会では熊本の能文化を隆盛に導いた細川忠興・忠利や、家老松井家に由来する資料のほか、寺社へ奉納された能面、関連する古文書・古記録など、熊本の能文化の豊かさを示す資料を展示します。



展示会報告

企画展『震災をふりかえる一大地とモノが語る熊本地震ー』

2021年3月20日（土）～5月30日（日）

平成28年(2016年)熊本地震から5年が経過する2021年春に開催した本展は、歴史、美術工芸、地質の3分野合同で展示を構成しました。

第一部・第二部の展示では館蔵資料の被災状況をはじめ、熊本地震後に当館学芸員が携わった被災文化財のレスキュー活動の経験をもとに、行政による支援から取り残される未指定文化財の問題や、近隣文化施設間の共助など、大規模災害の現場で生じた様々な事柄について紹介しました。第三部では、全国の大学や国の機関によって行われた熊本地域の断層調査について、実際のトレンチ調査で得られた断層の剥ぎ取り標本をもとに、過去の大地震の発生頻度を調べる手法や最新の研究成果を紹介しました。

新型コロナウイルスの影響により、会期半ばの4月27日より当館は臨時休館し、会期を全うできなかったことは大変残念でしたが、それでも会場に用意したメッセージボードはお寄せいただいた声で超満開となり、改めて災害を語り継ぐことの大切さを感じさせられた企画展でした。

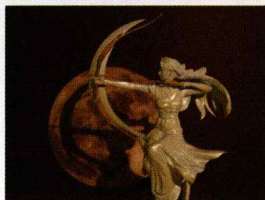
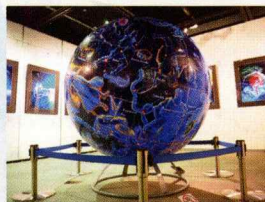


特別展『銀河鉄道の夜ー KAGAYA 星空の世界展』

2021年7月17日（土）～9月5日（日）

本展では、イラスト・プラネタリウム番組・星景写真など、様々な表現で宇宙・星空の世界を描くアーティストKAGAYA(カガヤ)氏の作品を紹介しました。

今回の特別展では、会場内での写真撮影、撮影した写真のSNS投稿を推奨していたため、各SNSで公式ハッシュタグ #kagaya熊本 で検索すると、日々来館者による感想や美しい写真が投稿されており、大変励みになりました(現在も見ることができます)。このような状況下での博物館の開館や特別展の開館には様々な考えや意見があるかと思いますが、熊本県内の感染者数が過去最多を更新し続ける中、担当者自身、この夏に開催して良かったのかとずっと悩んでいました。しかし、「遠出ができない中、熊本で素晴らしいものが見られてとても嬉しかった」「俯きがちだったが美しい星空の写真に癒された」「自粛続きで辛そうな子どもに思い出を作ってもらえた」などの感想をいただき、感染症流行下での博物館の役割、そして開館する意義を再考する良いきっかけとなりました。



イベント報告

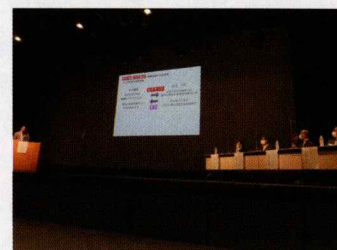
熊本地震シンポジウム～5年間でわかったこと、そしてこれからの防災・減災～ 4月25日（日）

平成28年(2016年)熊本地震から5年が経過する節目として、令和3年4月に熊本大学くまもと水循環・減災教育センターとの共催でシンポジウムを開催いたしました。

前半は広島大学の後藤秀昭先生、東北大学の遠田晋次先生、産業技術総合研究所の宮下由香里先生の3名の研究者による基調講演で、熊本地域にある活断層について、地形、メカニズム、今後の活動評価などの観点からわかりやすく最新の知見をお話いただきました。

後半は熊本大学の鳥井真之先生をはじめ、熊本で防災教育に携わる有識者によるパネルディスカッションで、この災害をどのように語り継いでいくべきか、来場者の皆さまや講演者も交えて議論しました。

会場内にはこれからの時代を担う若い世代の姿もあり、震災からの5年を振り返りつつ、郷土・熊本のこれからを考える貴重な機会となりました。



自由研究相談会

7月24日（土）・8月21日（土）

当館で実施している夏休み恒例の自由研究相談会。今年も科学実験や岩石・動物・植物・天文など、様々な分野の質問・相談が寄せられました。7月に行われた第1回目の相談会では、研究の進め方や実験方法など自由研究を始めるにあたっての相談、8月に行われた第2回目の相談会では各々の研究成果や標本などを持参していただき、標本の同定やまとめ方などに関する質問に対して各分野ごとに講師の先生や学芸員がお答えしました。

丁寧に作製された押し葉標本、講師の先生や学芸員も驚くほど見事に分類された岩石標本などもあり、身の回りの自然や科学に興味を持ち、実験や観察を通して根気強く、熱心にまとめ上げたことがそれらの成果物からとても伝わってきました。来年もたくさんの質問・相談をお待ちしています。



生きもの観察会

7月25日（日）

夏休みに入った最初の日曜日、熊本市民の憩いの場として親しまれている立田山で生きもの観察会を実施しました。生きもの好きの家族、昆虫大好きな子とその親御さんなどのほか、自由研究のネタ探しで気合の入った小学生たちも見られました。昆虫中心の観察会でしたが参加者の興味は多岐にわたり、わかる範囲で植物や変形菌類などについても紹介しました。みなさんの興味に添いながら進めていると思いのほか時間を要し、予定していた散策ルートを変更せざるを得なくなるほどでした。大人は、ジョロウグモとシロカネイソウロウグモ、ナガコガネグモなどのクモ類の暮らしぶりに関すること、子どもたちは手に取って観察できるバッタ類や甲虫類などの昆虫に特に関心が集まっていました。それぞれの親子が身近な自然を楽しむ様子うかがえ、有意義な観察会となりました。



博物館実習

8月25日（水）～30日（月）

当館では毎年、学芸員資格取得を目指す方々を対象とした博物館実習を行っています。

リモートでは学べない実物資料の取り扱いや博物館現場の実務を重視し、昨年度以上に様々な感染対策を講じた上で行いました。

今年度は大学に通う学部生だけでなく、既に教育現場で活躍されている社会人の参加もありました。そのため、今回は通常の各学芸分野の業務実習や来館者対応に加え、自然系分野ではミュージアムカフェと題して博物館職員と実習生が自由に語らう時間を設けたり、人文系分野では写真撮影実習の技術的な指導を昨年から更に充実させたりと、参加者のニーズに応じた実習となることを目指しました。

課題発表の「常設展示室のコーナー展示製作」では、実習生の皆さんの個性あふれる展示アイデアに触れられ、我々博物館職員にとっても学びの多い機会となりました。

